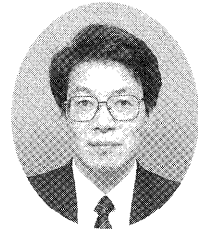


巻頭言

バーチャル・エンタープライズ



村上 憲也

本会事業担当理事 NTT データ通信 (株)

最近の業界紙や雑誌に頻繁に記述されている企業活動に関する種々の単語。マルチメディアに始まり、エレクトロニック・コマース(電子商取引)、EDI(電子的データ交換)、CALIS(生産・調達・運用支援)、電子マネー、電子決済、認証、セキュリティ、BPR(業務プロセス改善)、インターネット、イントラネット、電子メール、CA(認証)センター、等々。これらの単語が何を意味するかの解説は各々の専門家に任せるとして、これらの単語を受けて、各企業の研究者、技術者はそれぞれの思考でビジネスを創造しようと考えているに違いない。しかしこれらの単語が意味するところは、それぞれが企業活動そのものか、または企業活動全般(製品ライフサイクルと呼んでもよい)の中の一部、または企業活動を押し進める上での手段であると考えられる。たとえば、CALISという単語から多くの人が理解する意味としては、製品のライフサイクルを一貫化し、情報を共有して、生産性の向上とビジネススピードの向上を図ろうというものである。製品開発では、(1)企画、(2)開発、(3)設計、(4)製造、(5)販売、(6)保守・運用の各工程が行われる。ここで、最近の「単語」がどの工程にあてはまるかを考えてみよう。

企画や開発の段階では、情報収集やマーケット分析などが行われ、現状分析や技術動向調査も行われる。この段階では、協調作業(コンカレントエンジニアリング)、共同開発(コラボレーション)という単語が当てはまる。設計の段階では、インターネットを利用して各種のデータが収集され活用される。また効率的に作られたデータ管理システム(データウェアハウス)が必要になる。このような効率的なデータベースを構築するためには、BPR(業務プロセス改善)という単語が活躍する。また設計に必要な情報のやり取り、議論が行われ、情報共有や協調作業、共同開発といったことが行われる。そのための手段としてイントラネットやエクストラネット、電子メールが活躍する。製造の段階では、部品の調達が必要になり、その

ためにインターネットを利用した入札や物品調達のための契約が行われる。この場合にはエレクトロニック・コマース(電子商取引)という言葉が活躍する。契約のためにはセキュリティや認証といったことが重要になり、支払いの段階で電子マネーや電子決済が行われる。契約を電子的に行おうとすると企業間での取り決めが必要になり、EDI(電子的データ交換)により注文伝票や荷受け書といったものが送受信される。インターネットの世界では、不特定多数の人との契約が必要となることもあり、オープンEDIといった考え方が主流になってきた。販売の段階にいたると、インターネットを利用した広報活動や販売契約が行われ、ここでもセキュリティや個人認証といったことが重要になる。また販売活動、広報活動のなかでバーチャルモールといった手段が利用される。保守・運用の場面では、販売実績や障害情報が集められ、データベースとして管理される。これらの情報は、次の商品の企画、開発の時にデータマイニングと呼ばれる技術で再生される。

このように考えていくと、最近の新聞、雑誌などを賑わしているこれらの「単語」に振り回されるがごとく、各企業は、これらの「単語」に対応した新しい製品や企画、サービスを次々と発表している。これらの世の中に出された製品や企画、サービスの背後には、数多くの企業間の情報交換や取り引き、契約、信用チェック、開発の効率化の追及、製品の低価格化の努力が行われている。これはすでに多くの企業が1つの製品開発にかかわっていることの証しであり、グローバルな世界での企業活動であり、一般的な社会活動、消費活動と捉えることができる。これからの企業活動はバーチャル・エンタープライズの世界になると盛んにいわれ続けているが、すでに現実の世界で、意識外のところで企業連携が行われており、これこそがバーチャル・エンタープライズかもしれない。

(平成9年6月23日)